

平成二十一年

「路」年間賞

選考委員

内平登代子 江澤多香子 緒方 格子 加藤 佳子
小泉 正巳 佐々木彩乃 佐藤 頼昭 高橋里江子
瀧 正治 中野沙千古 二宮 茂男 藤原 和美
金子美知子

最高賞（賞状・入賞句彫刻楯）

冬木立むつくり父に似た氣迫

飯田 昭

◎正巳 ◎美知子 ○頼昭

優秀賞（賞状・入賞句彫刻楯）

快晴をめくるべからず雨になる

伊藤 我流

◎沙千古 ◎茂男 ○登代子

次点

散歩する歩幅で行こう向こう岸

吉澤 和子

◎登代子 ◎頼信 ○正治

以下高点順

腕まくりばかりしてきた無得点

佐藤 章子

◎正巳 ◎里江子

生ききっていないいまだまだ渴く喉

飯田サイコ

◎正治 ◎沙千古

枯れ草が焦げる最後の反抗期

瀧 正治

◎彩乃 ○登代子 ○正巳

発展の斧に傷だらけの山河

渡辺トミ子

◎多香子 ○美知子

ちっぽけな意地だ無言のまま帰る

田中寿々夢

◎里江子 ○美知子

やり残しばかりを照らし出す夕陽

瀧 正治

◎登代子 ○沙千古

躓いた石が正面向けという

藤原 和美

◎多香子 ○彩乃

大空と同じ夢見る水溜り

加藤 胖

◎格子 ○頼昭

薄皮に包む無臭の夫婦愛

高橋里江子

◎格子 ○沙千古

自己嫌悪つるりと剥けぬ茹で卵

後藤 洋子

◎頼昭 ○正治

身の丈で踊れと影に叱られる

荻原 鹿声

◎正治 ○格子

木に竹を接いでも守りたい景色

飯田サイコ

◎茂男 ○和美

大空の蒼さを知った終戦日

高橋里江子

◎美知子

青春をまだ引き寄せる風の糸

谷田部富義

◎佳子

助太刀の耳が汚れて返される

瀧 正治

◎佳子

雪が降る 人間だけがない街

緒方 一雄

◎彩乃

喜寿過ぎて傘寿も素手で掴むべく

岩淵 黙人

◎和美

毒きのこ童話の森で発芽する

中野沙千古

◎和美

生涯を誰も褒めない足の裏

小泉 正巳

○多香子 ○格子

心まで届いていないストレッチ

加藤ゆみ子

○正巳 ○頼信

打ち寄せる波に牙出す花もある

岡田 話史

○頼信 ○茂男

いのちの色に 八月の赤い空

藤原 和美

○美知子

夕焼けを仰ぐ齡を染められる

佐藤 章子

○美知子

後ろ指さされ続けてきた造花

日野 輝紀

○美知子

役割を終えて鎧を取り換える

荻原 鹿声

○登代子

菩提樹の下で探している小判

日野 輝紀

○登代子

子の名前忘れた母の綿毛飛ぶ

坂本 嘉三

○登代子

香ばしく枯れて老木愛される

伊藤 英龍

○多香子

戸惑っている晩年という迷路

金澤 昭

○多香子

生き甲斐を見つけたらしい靴の音

常石 麗子

○多香子

車椅子押しているのも高齢者

金澤 紀六

○多香子

ネクタイも手持ち無沙汰な二度の職

常石 麗子

○格子

風船が旅立った日の肩車

内平登代子

○格子

青空をピリリと破りたい離職

芹沢美知子

○格子

こっそりと陰干しにする胸の底

田中 秀貴

○佳子

手のひらを返すタイミングがうまい

大橋 政良

○佳子

やわらかい笑顔で骨を抜いてゆく

柚田 重代

○佳子

死に方の本を沢山買って来る

久津間卯義

○佳子

外づらは折り目正しい新聞紙

北川 隆子

○佳子

虹なんか出るから期待してしまう

平沢やす子

○正巳

忙しい振りをしているだけの蟻

日野 輝紀

○正巳

こめかみで秋がブランコ漕いでいる

藤原 和美

○正巳

冬の底信じる石がひとつある

荻原 鹿声

○彩乃

物置に入れっ放しにした素顔

木村 紀夫

○彩乃

夢の数煮たり焼いたり炒めたり

伊藤 我流

○彩乃

未だそこに根付いていたか彼岸花

高橋里江子

○彩乃

一歩ずつ階段上がる空がある

加藤 佳子

○頼信

樹を植える世界の終るその日まで

中野沙千古

○里江子

運つかむ両手はいつも空けておく

田中 秀貴

○里江子

孝行はあの時だけかサクラサク

緒方 一雄

○里江子

マニフェスト木の葉に書いたものもある

小泉 正巳

○里江子

ストレスの淵を飛んでる紙吹雪

鈴木 安広

○里江子

ひび割れたカガミで磨き込む笑顔

二宮 茂男

○正治

シュレッダーにかけてしまった夢芝居

大橋 政良

○正治

近づけばモノクロになる花畑

柚田 重代

○正治

いい孤独抱いて静かな海となる

木村 紀夫

○沙千古

味方まで欺く船がよく揺れる

堀井 勉

○沙千古

明日という未知へ一途な亀となる

常石 麗子

○沙千古

死ぬなんて言うなよ直ぐに日が昇る

田中 秀貴

○茂男

通販であろうと枇杷に種はある

緒方 一雄

○茂男

へそくりを小出しに行けるところまで

妹尾 安子

○茂男

日を追って地球の機嫌悪くなる

石井 沙江

○茂男

薄型にテレビ文化もうすつぺら

木村 道子

○和美

高齢期わたしはだれになってゆく

金澤 紀六

○和美

弾除けは捨ててしまった一人杖

金澤 昭

○和美

何故がない昨日も今日も平和です

神宮寺茂太

○和美

選考の経緯・方法は次の通りです。

一、選考対象句は、「路」誌「540号（平成二十一年二月号）～551号（平成二十二年一月号）」の推薦句。

二、選考委員は、七句（特選二句 各三点、佳作五句 各一点、但し、主宰はそれぞれに一点を加算する）を推薦する。

合計点の高い順に、最高賞、優秀賞各一句を主宰が決める。上位が同点の場合は、主宰が一句に決定する。前記の資料を「編集幹事会議」へ提出して確認を得た。
〈整理 堀井 勉〉

寸評

金子美知子

最高賞

葉を落とし厳冬の中で生い立っている木。その毅然とした様から、時代の荒波に立ち向かい乗り越え生きた父に思いを馳せて詠み、その凜とした姿勢に心を動かされます。

優秀賞

日毎の平穏な暮らしや、平和な世が永遠であるようにとの願望を込めた気持が汲みとれ、うなずかせます。

両氏ともに心情を吐露し伝わらせて、感銘を受ける年間賞に相応しい作品でした。

受賞の言葉



飯田 昭

思いもよらない吉報が、吟社より届き、まさか私の作品がと一瞬思いがよぎりました。最近は思考力の鈍化で推敲に刻を費やす事が多く、手を焼く有り様です。多作多読を念頭に自分の作風に活を入れてはいますが、これがなかなか躍動してくれず、独り善がりの明け暮れの果て、光明を見出す機会をいただけたのは嬉しい限りです。感謝すると共に、御礼申し上げます。



伊藤 我流

朗報にただただ恐縮しております。三陸の気象は殊の外気紛れです。それにかこつける訳ではありませんが私の川柳も気紛れ、なかなか素直にならない現状に少なからず焦れております。

朝の快晴にほっとするもの一日もつのがまれ、曇り、雨、風、三百六十五日埒も無い事を吐いている次第です。選考委員の皆様、有り難うございました。